

謝罪と責任の承認、謝罪の受け入れ：アメリカ TV ド ラマの例より

Apologizing, Taking Responsibility, and Acceptance of an Apology: Examples from American TV Dramas

梅田 礼子

Reiko UMEMEDA

和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門

Abstract

This paper examines how English native speakers admit the responsibility for what they cause and apologize, by observing some conversations from American TV dramas. It also observes how people accept/not accept an apology, using the model of apology suggested by Suszczyńska(1999).

The observation revealed that one of the key factors of the speech act “apologizing” is taking responsibility and its degree. If the listener(the receiver of the apology) thinks that an apology is not enough in that the causer of the problem is not taking full responsibility, he/she may not accept it. In cultures where “taking responsibility” is difficult, the listener will evaluate the speaker’s effort. Even in a situation where the listener has difficulty in forgiving, if he/she notices the effort of the speaker (the causer of the trouble) in taking responsibility, he/she can appreciate the effort and accept the apology.

キーワード/Keywords: 謝罪、責任、謝罪の受け入れ/apology, responsibility, acceptance of apology

1. はじめに

社会生活を送る中で、円滑なコミュニケーションを図り、よりよい人間関係を保つことは多くの人々が望むことであろう。異文化コミュニケーションにおいては、語彙選択や文法ミスにより誤解が生じることもあれば、文化・慣習の違いによって誤解が生じることもある。

上原(2002)は「学際的な研究領域である異文化コミュニケーション論では、異文化において、正確な理解が必要とされる場面でそれができない事例が数多く報告されている。それらには言語能力はもとより、関係性のあり方(Kim et al., 1994; Triandis, 1988, 他)

が違ったり、通常、あまり意識にも上らない些細な文化的行為(Hall,1959, 1966; Kotchman,1990; Scollon & Scollon, 1990 他)が誤解や断絶の原因になることが記されている」(上原,2002:11.、引用文中の文献は上原(2002)での引用)と指摘している。

また、上原(2002)は「異文化をもつ者は、一般に、他者との共有知識の足りなさのため、相互作用の過程においてさまざまな失敗をしたり困難に遭遇することが多い」(上原, 2002:11)と述べ、「地球時代の今日、コミュニケーションに文化の影響があることを知る『文化的認識』をもつと共に、それだけでは不十分で、客観的でより深い文化理解が求められている」(上原,2002:12)と指摘している。

大谷(2007)が区分しているように、「コミュニケーション能力には『情報伝達能力』と『対人関係構築・維持能力』の2つがある」(大谷,2007:53)。異文化間では、文化基盤の違いにより、対人関係の構築・維持が難しいと考えられる。特に感情が関わる事柄の場合、ミスコミュニケーションの影響が人間関係にも及ぶこともありうる。熊谷(1993)は異文化コミュニケーションにおける誤解について、「ことばや非言語行動、習慣の違いなど様々なレベルで起こり得る。しかし、言語能力不足のためにおこる誤解、たとえば単語の言い間違いなどに比べ、言語行動の仕方が異なるために起こる誤解では、当事者どうしがそれを異なるゆえの行き違いと気づかずに、果ては相手の人間性を疑うということにもなりかねない」(熊谷,1993:9)と述べている。例えば、堀江(1993)が日本とタイ、生越(1993)が日本と韓国、高橋(2011)が日本と中国の間での「謝罪」にまつわる誤解を論じている。生越(1993)は差異の一つとして、そもそも謝罪をすべきと考える状況が日韓で異なることがあると述べている(生越,1993:37)。例として、「韓国ではバスの中で立っている人が、座っている人の膝の上に無言で荷物を置き、降りるときも例は言わない。座っている人が立っている人の荷物を持つのは当然であるという社会的慣習」を挙げている(生越,1993:38 注2)。高橋(2011:4-5)は中国と日本の謝罪についての認識の違い、例えば日本人が「中国人は謝らない」という印象を持つことが多い原因として、「謝罪表現の曖昧さが日本語にはある(「感謝」にも用いる)が、中国語には無い、謝罪のみである。表す範囲が異なる」ことや、「謝るべきと考える場面が違う」こと、「コミュニケーション方略の違い」(例えば中国では謝罪の言葉だけでなく、補償行為を重視する)を互いが認識していないことなどを挙げている(高橋,2011:4-5, 筆者による内容要約)。そのために、相手のことを「謝るべき場面で謝らない失礼な人だ」「謝り方に誠意が見られない、不誠実だ」など悪い印象を持つてしまうことがあるようだ。

様々なコミュニケーション活動の中でも特に「謝罪」は、誤解が生じると、このように互いの信頼関係に傷がつくことが起こりうるので、謝罪すべき場面や謝罪の仕方の文化による違いを知ることは重要である。

「謝罪」の仕方についての研究は、前出の熊谷(1993)・堀江(1993)・生越(1993)他、Cohen and Olshtain (1981), Blum-Kulka and Olshtain(1984)の分類や、この2つを基に「謝

罪の型」を整理した Suszczyńska(1999)など、さまざまある。

しかし、「謝罪」というコミュニケーション行動は、謝罪する側の謝罪の仕方だけでなく、「謝罪を受ける側」が、謝罪をどのように感じ・解釈し、その後「受け入れる」のか、「拒否する」のか、も含めて一連のものである。そこで、本稿では、特に謝罪を受ける側に注目し、材料としてアメリカ TV ドラマの会話を用いて、謝罪の状況、謝罪する者の責任、謝罪を受ける側の解釈、その受け入れ結果について、実際に談話の中でどのように謝罪が行われたか、また、受け入れられた／られなかったか、を観察する。梅田(2021)でも同様に、聞き手を含めた一連の謝罪行為を扱ったが、謝罪が受け入れられる場合、失敗する場合、などいろいろなケースを挙げたものであった。本稿ではエピソード・場面を絞り、状況を細かに観察し、「責任を認める（または認めない・一部認める）」という点に焦点を当てる。

2. 分析方法

アメリカ TV ドラマの謝罪場面を用い、その状況・発言を観察し、謝罪をするにあたって自己の責任をどのくらい認めているのか、ということと、聞き手が謝罪をどのような場合に受け入れるのか・拒否するのか、ということについて分析する。

観察に使用したドラマは「クローザー」(The Closer, 2005~2012 年)と「フレンズ」(Friends, 1994~2004 年)である。刑事ドラマでの仕事の場面と、恋愛・友情コメディドラマでの恋愛関係の場面を取り上げ、異なる状況での謝罪について観察する。

「クローザー」では、主人公が仕事上巧みな嘘をつき、そのことについて謝罪しないという場面を取り上げる。嘘のつき方、責任範囲の認め方、謝罪の仕方という点で興味深いためである。また、謝罪を受ける側が、その謝罪に納得できず拒否する例である。

「フレンズ」では、責任範囲を把握していないまま謝罪してしまった例を取り上げる。また、謝罪を受け入れる側の努力が観察できる場面であり、興味深い。

両ドラマの概要は以下のとおりである。

・「クローザー」(The Closer)：刑事ドラマ。ロサンゼルス警察重大事件捜査課（以下「捜査課」）のリーダーであるブレンダは、元 CIA で尋問のスペシャリスト。自白を引き出すことに長けている。事件を解決する「クローザー」である。取り上げた回では FBI 捜査官フリッツと婚約同棲中。シーズン 4 第 4 話（以降シーズン、エピソードを S, Ep と表記）「取引不成立」

・「フレンズ」(Friends)：男女 3 名ずつの親友を中心とした恋愛・友情コメディ。古代生物学者ロスと、その妹モニカの同級生で親友レイチェルとの恋愛を中心にストーリーが展開する。ロスとレイチェルが何度も喧嘩しては仲直りしながら、友人から恋人へと関係を発展させていく様が人気の一因となっている。その中でも、有名な喧嘩の場面を取り上げる。S3Ep15「恋の行方(前編)」、S3Ep25「渚でロスとレイチェル」、S4Ep1「渚でロスとレイチェル、その後」、S4Ep21「二人の思い出、ロスとレイチェル」

このうち、特に「クローザー」については、Suszczyńska (1999) が整理した「謝罪の型」を用いて分析する。謝罪を複数の観点に分けていて分かりやすく、異文化間でも汎用性があると考えられるためである。ここでは「謝罪の型」の概要のみを示し、型の詳細や例は3章3.1.1節で示すこととする。

(1) The model of apology by Suszczyńska(1999)

- 1) Illocutionary Force Indicating Devices (IFIDs)
- 2) Explanation or Account
- 3) Taking on Responsibility
- 4) Concern for the hearer
- 5) Offer of Repair
- 6) Promise of Forbearance

(Suszczyńska,1999, p.1056)

3. 考察

3.1 責任を認めた範囲に納得が行かず、謝罪を拒否する例（「クローザー」より）

〈あらすじ〉ある殺人事件の捜査において、FBIは犯人が所属するギャングのボスを追っており、犯人に処罰軽減の代わりにボスに不利な証言をさせたいと考えている。これは犯人を殺人犯として刑罰に処したい刑事ブレンダの意図と衝突する。ブレンダはFBIを騙して自分たち捜査課で犯人を逮捕する。このことでFBI捜査官フリッツがブレンダに対して激しく怒る。ブレンダは詫びるが、フリッツはその謝罪を拒否する。

S4Ep4「取引不成立」(Live Wire)

〈ストーリー詳細〉ディーンはギャングで麻薬の運び係をしている。旧友ベンジャミン（以下ベン）が不動産会社をクビになり困っていたので、麻薬の運び係の仕事を紹介した。ディーンが麻薬を少しくすね、ベンは「麻薬を返してくれないなら、君のことをボスに訴える」と言う。「僕が殺されるより君が殺される方がいい」という言葉に怒ったディーンは、くすねた麻薬を返す約束の日、やり取りに利用していた空き部屋の近くの通りでベンを射殺した。

被害者ベンがつけていた隠しカメラの映像には犯人の腕と銃しか映っていなかった。ベンの壊れた携帯電話をブレンダがフリッツを通じてFBIのラボで分析してもらい、それがギャングから与えられたものと判明した。ブレンダは新聞記者に「被害者が状況を録画していたが、その受信機は見つかっていない」と嘘の記事を書かせて犯人をおびき寄せようとする。

犯人ディーンが所属するギャングはFBIが数年間追っていたもので、FBIは犯人に刑罰軽減の代わりに、ギャングの悪事の証人となるという司法取引を申し出るつもりである。フリッツは家でブレンダに「捜査権をFBIに渡してほしい」と願い出る。ブレンダは渋々承知し、見返りにギャングの資料を要求、フリッツから受け取る。（その資料は後に犯人尋問の際に使用している。）

ベン是不動産会社をクビになったことを妻から隠すため、会社所有の売れない空き

物件に毎日通っていた。そこでディーンと麻薬の受け渡しをしていた。隠しカメラの受信側パソコンもこの部屋にあった。捜査課はそのことを突き止めていたが、FBIのフリッツには知らせずに、その部屋で犯人を待ち伏せて逮捕した。

フリッツはブレンダが捜査権を FBI に譲ってくれたと信じていたため、FBI 捜査官たちとともに被害者の自宅周辺で張り込み、無駄足を踏まされた。さらに証人となるはずの犯人をロサンゼルス警察に取られてしまった。

さらに、ブレンダは、犯人ディーンの取り調べの際、「FBI は司法取引を持ち掛けるだろう。あなたは隠しマイクを着けてボスと会話し、麻薬を扱っていることを録音に収めるように言われる。FBI はあなたの安全を守ると言うだろうが、彼らはきっと失敗する。彼らの目的はボスの逮捕・組織の撲滅であって、あなたの安全は二の次だから」と説明する。それでも犯人は「このまま終身刑になるより、FBI の取引の方に賭ける」と、FBI に身柄を引き渡されることを望んだ。

(ア) 場面 1 : 尋問が終わり、FBI 捜査官フリッツに犯人を引き渡す場面の会話。フリッツ(F)と、ブレンダ(B)

Pope(Police chief): Okay, the suspect's all yours.

F: (腕組みをしたまま、ブレンダを少し睨みながら) Anything else I should know?

B: No. I've prepared him for you as well as I can.

F: Great. (フリッツは取調室に入る)

B: (Sigh)

Pope: You did your best, Brenda. We can't win them all.

B: I should not have lost this one, Will.

S4Ep4 「取引不成立」

フリッツは「他に伝えることはないか?」と聞いている。ブレンダが空き部屋についての情報をフリッツに知らせず FBI に無駄な張り込みをさせて出し抜いたこと、フリッツとの「FBI に捜査権を引き渡す」という約束を破ったこと、について詫びる機会を与えているわけである。しかし、警察本部長ポープの手前もあってか、初めからしらを切るつもりだったのか、ブレンダは平然と“*No.*”と答えている。フリッツは怒りを抑え、かろうじて“*Great.*”と答えている。ブレンダの上司であるポープの前で、婚約者であるブレンダと口論したくない、仕事にプライベートを持ち込みたくないという考えがあったと推測される。また、ポープはブレンダがアトランタ時代に付き合っていた相手であり、その前でブレンダに怒りをぶちまけては、男性として恥ずかしいという個人的な思いもあったかもしれない。

その後犯人マーフィーは FBI に移り、説明を聞く間に「やはり警察に戻りたい、刑務所に居て生きる方がいい」と言い出し、警察に戻った。

犯人が、通常ならありがたい「司法取引」を拒否して、刑務所での終身刑を選んだことから、フリッツはブレンダが犯人に何か情報を吹き込んでそのように仕向けたと気付く。約束を破った、無駄な張り込みをさせただけでなく、犯人に情報を吹き込んで

FBI の取引を拒むように仕向けた、と 2 重、3 重に嘘をつかれ、フリッツの怒りは高まる。ブレンダの策略のおかげで、FBI 組織に対して、多大な費用と労力をかけた無駄な張り込みをさせてしまった、犯人を証人にしてギャング撲滅を図る作戦も崩れた。フリッツには FBI 組織に迷惑をかけたことを詫びて回る、対応の会議に出る等の仕事も降りかかる。

(イ) 場面 2 : 犯人引き渡しの翌朝、ブレンダの居る家に徹夜明けで帰って来たフリッツとブレンダの会話。(ブレンダの発言中、謝罪行為に関わるものには、B1,B2...と番号を付す。ストレスを置いている語は太字で示す。また特に注目したいイントネーションは矢印で示す。↓下降調。発言の重なりは下線で示す。)

F: (Sigh) Hello. (フォーマルでよそよそしい感じ)

B: Hi. (少し恐れるような表情で)

F: I got some good news for you.

B: What's that?

F: Your friend Dean Murphy is headed back to LAPD.

B: Didn't the FBI offer him a deal?

F: Oh, yeah. We offered him a deal. But, you know, somehow, even after an all-night discussion, (外した FBI バッジをカバンの上にトス) he decided he'd be better off staying at prison. Is that what you told him?

B1: I told him the truth.

F: Well, great, great, great. You closed your case. That's great. (表情は冷たいまま)

B2: Dean Murphy committed premeditated murder. He confessed to it. He should go to jail for the rest of his life. The end.

F: Well, that's one way of looking at it. Here's another. You came to me for help. I gave it to you. You **took** everything I had, and then you stole my case, and you made me extremely vulnerable at work. That's a somewhat milder version of what your killer did to his friend, and I gotta tell you, Brenda, I am so sick of this double standard.

B3: What double standard? (語気強く声大きめで)

F: You sent me on a needless and very expensive stakeout. You undermined three years of hard work, and if I had done anything **remotely** similar to that, if I had screwed with your case, my God, you would have changed the locks on the doors. I would have been so far out of line, but here is the difference; I **would know** it. And I would try to **correct** it, somehow.

B4: Now, wait a minute. Just hold on. I never lied to you. (フリッツ ショックを受けた表情) I gave you exactly what you asked for. Exactly. (フリッツ 怪訝な表情) Now, I'm sorry, I,... I should have called you when we took Dean into custody, so I apologize for that. (ブレンダ 頷く)

F: That? (↓) That's what you are sorry for? (↓) (フリッツ 呆れて、むしろ静かに)

B5: Yes. (誇らしげに顔を上げ、頷く)

F: Really? (ブレンダ頷き続けている) That's it? (ブレンダ頷き続けている) (フリッツ 言葉がない、という感じで首を少し横に振り) Apology not accepted. (家を出ていこうとする)

B6: All I did... Now, wait a minute, Fritz. All I did was try to get the justice system to work for my victim. That is all I did.

F: That's bullshit! (上のブレンダの発言に重ねて怒鳴る。以降怒鳴りながら) You didn't do it for the justice system! You didn't do it for the victim! You did it to close your case! That's it! It's obviously the most important thing to you. It's clearly not me! And, you know, maybe that's fine, but Brenda, for **once** in your life, be honest with yourself! (ここで少し声を落とし、ブレンダとは目を合わさないまま) I am tired. I am hungry. I am angry. I'm gonna find my sponsor. I'm gonna go to a meeting, maybe two. (フリッツ玄関の方に向かう。)

B: (Sighs) (フリッツは怒りに震えながら、玄関のドアを勢いよく閉めて出て行く。その大きな音に驚き、泣き出しそうな表情のブレンダ。 S4Ep4 「取引不成立」)

3. 1. 1 ブレンダの謝罪とフリッツの反応の分析

前出 (イ) の会話の、ブレンダの発言を、Suszczyńska(1999)による「謝罪の型」(下(2)、以下「型」)を用いて詳しく見てみる。これは「謝罪」に用いられうる方略を挙げたもので、毎回全てを使うというわけではない。また、これらのうちどれを選択するかは文脈や文化によるが、様々な文化である程度似ている、と Suszczyńska(1999)は指摘している。

(2) The model of apology by Suszczyńska(1999)

1) Illocutionary Force Indicating Devices (IFIDs)

- a. An expression of regret, e.g. *I'm sorry*
- b. An offer of apology, e.g. *I apologize*
- c. A request for forgiveness, e.g. *Excuse me/ Forgive me/ Pardon me*

2) Explanation or Account

Any external mitigating circumstances, “objective” reasons for the violation, e.g. *The traffic was terrible*

3) Taking on Responsibility

- a. Explicit self-blame, e.g. *It is my fault/ my mistake*
- b. Lack of intent, e.g. *I didn't mean it*
- c. Expression of self-deficiency, e.g. *I was confused/ I didn't see you/ I forgot*
- d. Expression of embarrassment, e.g. *I feel awful about it*
- e. Self-dispraise, e.g. *I'm such a dimwit!*

f. Justify hearer, e.g. *You're right to be angry*

g. Refusal to acknowledge guilt

Denial of responsibility, e.g. *It wasn't my fault*

Blame the hearer, e.g. *It's your own fault*

Pretend to be offended, e.g. *I'm the one to be offended*

4) Concern for the hearer, e.g. *I hope I didn't upset you/ Are you all right?*

5) Offer of Repair, e.g. *I'll pay for the damage*

6) Promise of Forbearance, e.g. *It won't happen again* Suszczyńska(1999, p.1056)

まず、B1: I told him the truth.は、フリッツの問い「FBIの司法取引をのんでギャングの悪事の証人になる（ボスに気付かれて殺される可能性もある）より、刑務所で刑に服する方がマシだ、と犯人に吹き込んだのか？」に対して、「真実を言ったのよ」と語気強く答えている。これは 3) Taking on Responsibility の g. Refusal to acknowledge guilt: Denial of responsibility と分類してよいだろう。3)g.の例にある“*It wasn't my fault.*”とは発言は異なるが、のちの B6 の発言にあるように、“justice”をキーワードに、自分の行動は、「刑務所で刑に服させることが正義だから」であり、私自身の考えではない、正義のためだ、と、自分の責任を否定していると言える。

次の B2 で、その内容を詳しく述べている。B2: Dean Murphy committed premeditated murder. He confessed to it. He should go to jail for the rest of his life. The end. 「ディーンは（衝動的殺人でなく）計画的殺人をした。そのことを自白した。だから終身刑が妥当。それだけ」という発言は、警察としては正当な主張である。しかし、“The end.”は the end of discussion、議論の終わり、話し合う余地もないほど当然のこと、というニュアンスで、部下に言うような口調である。婚約し同棲中の相手に対しては冷たい感じであり、フリッツの怒りを加熱させる一因である。

次の B3: What double standard? は直接謝罪行為とは関係がないが、フリッツの “I am so sick of this double standard.”（こういうダブルスタンダードにはうんざりだ。）という発言に対するもので、興味深い発言である。表情は意味が分からないという感じに見えるが、フリッツが「君は僕に嘘をついたり騙したりもする。逆に僕が君に嘘をついたり騙したりしたら、激怒するくせに」ということを意味していることを、ブレンダはおそらく分かっている。ブレンダは普段、犯人に対して、証拠をつかんでいない振りをしたり、捜査課課長ではなく新米刑事や、そそっかしい事務助手の振りをしたりして、相手を油断させて自白を引き出すことに長けている。それを考え合わせると、この「意味が分からない」という無垢に見える表情も芝居のように思われる。おそらくフリッツもそう感じているのだろう。次の「ダブルスタンダード」を説明しているフリッツの発言は、語気が強まり、畳みかけるように続いている。さすがのブレンダも間に割って入れないほどの勢いである。ブレンダのこのとぼけた発言と態度がフリッツの怒りを増大させたことが分かる。

次の B4 でも、ブレンダは前半ではまだ謝罪していない。

B4 前半: Now, wait a minute. Just hold on. I never lied to you. (フリッツ ショックを受けた表情) I gave you exactly what you asked for. Exactly. (フリッツ 怪訝な表情)

ブレンダは「あなたに嘘をついてはいない」「あなたの要求に私はきちんと応えた」と言い返している。この「嘘をついていない」というのは、「犯人が自宅とは別の空き部屋に証拠隠滅行く」という情報を伏せただけであって、「犯人はベンの自宅に証拠隠滅に行く」と嘘を教えたわけではない、という言い抜けである。フリッツにとっては、情報を伏せられたこと自体が裏切りであり、許せない点である。

また、「要求にきちんと応えた」というのは、「捜査権を譲った」ということだが、実際には表面上譲ったように見せかけただけで、陰で、捜査課は犯人がやってくる空き部屋に張り込んで犯人を逮捕した。しかも、ブレンダははじめからそのようにフリッツを出し抜くつもりでありながら、フリッツの「捜査権譲渡」の願い出を渋々承知するという巧妙な芝居をしていた。

さらに“Exactly.”と強調しているが、これも、出し抜かれたフリッツ側にとっては、嘘でしかなく、怒りを増大させる一因である。

B4 の後半で、ようやくブレンダが謝罪の表現を口にする。“Now, I’m sorry, I… I should have called you when we took Dean into custody, so I apologize for that.” とブレンダは謝罪表現 “I’m sorry.” “I apologize for that.”を口にした。「型」の 1) Illocutionary Force Indicating Devices (IFIDs) a. An expression of regret(e.g. *I’m sorry*)、および b. An offer of apology(e.g. *I apologize*)がやっと登場した。通常は謝罪行為の初めの方に出る表現である。普段部下を率いるしっかり者で、仕事柄か性格ゆえか、あまり素直に謝ることのないブレンダにとっては、これでも精一杯なのだろう。

しかし、詫びた行為対象が「犯人を逮捕した時に連絡しなかったこと」だけであった。しかも、連絡しなかったのはわざとである。出し抜かれたことに気付いたフリッツが警察にやってくるとブレンダが見通していたことは、尋問室に入る前にモニタールームの事務助手に「客人が来たら (イヤホンを通して) 知らせて」と命令していることから分かる。

この謝罪に対して、フリッツは “That? (↓) That’s what you are sorry for? (↓)” と下降調で言っている。疑問文なので通常なら上昇調になるところだが、ブレンダが、自分を騙したこと、情報を与えないという形で嘘をついたことについては謝らなかったことに呆れ果て、つぶやく感じの下降調で言っている。さらに、ブレンダは B5: Yes. と誇らしげに (または誇らしげな振りをして) 顔を上げ、頷いた。この行為もかえってフリッツの怒りを増している。フリッツは F: Really? That’s it? (本当に? (悪いと思っていることは) それだけなのか?) と確認している。ブレンダは頷き続けている。

そしてついにフリッツは呆れ果てたという感じで首を少し横に振り、“Apology not accepted.” (謝罪を受け入れられない。) と静かに言い、家を出て行こうとする。

ここでブレンダが反省して静かにフリッツを見送ればまだよかったのだが、次に再度、自分を正当化する発言をする。

B6: All I did... Now, wait a minute, Fritz. All I did was try to get the justice system to work for my victim. That is all I did.

これも B1、B2 と同じく、「型」の 3) Taking on Responsibility の g. Refusal to acknowledge guilt: Denial of responsibility と分類してよいだろう。「被害者のために、正義のシステムが働くように、私はその助けをただけだ」ということである。これはブレンダの本当の気持ちだったかもしれないが、これまでも婚約者である自分との関係よりさんざん事件の捜査を優先されてきたフリッツにとっては、まったく言い訳としか聞こえない。ついに、ブレンダの発言を遮り、「正義のためでも、被害者のためでもないだろう、自分が事件を解決したいだけだろう」と大声で怒鳴った。ただ、後半には「それでもいいかもしれないが、一度でいいから素直になって、そのことを認めろよ」と、仕事だけでなく、2人の関係についても考えている発言もあった。これだけ酷いことをされても、フリッツはブレンダの能力と、時にはか弱く、可愛い面、優しい面もあることを知っていて、怒りながらもまだ少しブレンダとやり直して行きたいという気持ちが表れている。

ここまで怒鳴られて、さすがのブレンダも反論はできず、呆然と立ち尽くしている。おそらくは、自分が巧妙に婚約者である FBI 捜査官フリッツを騙したことは自覚があるのであろう。それでも正義や被害者のためだ、として、特定の部分についてしか詫びなかった。

フリッツにとってはブレンダが自分を騙したこと、そのため FBI に多大な迷惑をかけたこと、3年以上かけて追ってきたギャングを壊滅させる作戦が破綻してしまったこと、が許しがたく、それらすべてについて謝罪してほしかった。しかし、ブレンダは極一部の小さな点しか謝らなかった。したがって、いくら普段は強気でやや偉そうなブレンダが（見かけ上は）しおらしい様子で謝っても、その謝罪を受け入れる気には到底なれなかったわけである。

自分の行いのどの部分が悪かったと認めるか、も謝罪の重要な要素であることが分かる事例である。

3.2 責任不明瞭のまま取り繕うために謝ってしまい、失敗した例（「フレンズ」より）

日本では関係を維持したい、事態を收拾したいためにとりあえず謝る、責任範囲は不明瞭なまま謝る、ということがある。謝罪の受け手も、相手の責任の認め方よりも、謝罪の丁寧さや反省している態度によって、相手の行為を許すことが多い。したがって、謝罪の受け入れの際の言葉が「謝罪を受け入れる」といった明瞭な言葉ではなく、「もういいよ」「まあまあ（もう謝罪やお辞儀はいいですから）」「分かった、分かった」というような一種曖昧な表現であることが多い。この場合の「分かった」も、相手の責任の認め方を理解した、という意味ではなく、「あなたが反省していること」「謝罪が真

摯であること」が分かった、という意味である。

一方、TVドラマの実例で見る限り、アメリカでは責任を認めて、それに関して謝罪する。では、そのアメリカ社会で、日本的な「事態收拾したいがために、責任範囲が不明瞭なまま謝る」を行った場合どのようなようになるか、その例がドラマ「フレンズ」の有名な言い争いの場面にある。

〈あらすじ〉古生物学者ロスと、ロスの妹モニカの親友レイチェルは交際していたが、レイチェルが念願のファッション関係の仕事に就き、熱心に働くあまり、残業が多く、2人の時間が少なくなった。そのことにロスは不満。レイチェルの誕生日、ロスは食事に行って一緒に祝おうと考えていたが、レイチェルはまたも残業。ロスはサンドイッチやワインを持ってレイチェルの職場に押しかけ、レイチェルを不快にさせてしまう。遅く帰って来た2人は、激しい口論になった。その挙句、レイチェルが冷却期間を置くことを提案する。 S3Ep15「恋の行方（前編）」

（ウ）場面3：ロスとレイチェルの口論。

Ross : What do you want ?

Rachel: Mmm, I don't know! Let's have a break !

Ross: OK. I'm gonna have a frozen yogurt or something.

Rachel: No, Ross. A break from "us."

Ross: ... （無言で部屋を出て行く） S3Ep15「恋の行方（前編）」

ロスは出て行き、友人チャンドラーとジョーイが参加しているパーティーに合流する。彼らのアドバイスを受けて、レイチェルに電話する。実はレイチェルも「しばらく別れよう」と勢いで言ってしまったことを後悔し、ロスからの連絡を待っていた。（当時は携帯電話がまだ普及していなかった。）ロスからの電話を受けてほっとするレイチェルだったが、運悪く、レイチェルたちの喧嘩を見て心配していた同僚男性が、出前料理を持参してレイチェルのアパートに来ていた。その同僚が話しかけてしまい、ロスに男性がいることがばれる。ロスは以前から、その同僚がレイチェルに仕事を紹介したのは下心があるからだと思っていたため、レイチェルが浮気したと誤解してしまった。そのショックで傷ついているときに、パーティーに居たコピー屋の女性がロスを以前から気に入っていた、と迫り、ロスは彼女と一夜を共にしてしまう。

後日ロスは正直にそのことをレイチェルに告白して謝罪するが、レイチェルは「break 冷却期間」となってすぐにロスが別の女性に走ったことが許せない。一方、ロスは“*We were on a break.*” 「僕たちは別れていた」と受け取っており、別の女性とのことは別れた後の話であり、浮気ではないと考えている。その点のすれ違いが、別れてからも尾を引くこととなる。

S3Ep25「渚でロスとレイチェル」では、友達6人でビーチに泊まりで出かけた際に二人はいいムードとなる。だが、ロスはボニーという女性と交際を始めたばかりだった。レイチェルがやり直したいという態度を見せ、レイチェルに戻るか、ボニーと付き合

い続けるか、ロスに悩む。そして、S4Ep1「渚でロスとレイチェル、その後」で、ついに、レイチェルと決め、彼女の部屋を訪れる。喜ぶレイチェル。まずはボニーとの関係を終えるため、ロスはボニーに話に行く。別れ話が長引いて数時間かかり、朝方にやっとレイチェルの元へ戻った。

レイチェルは、彼らの別れ話が済むのを待つ間に、交際を復活する条件を長い手紙(両面で18枚)にしたためていた。ロスは、そのあまりにも長い手紙を読んでいる間に寝てしまった。翌日、レイチェルに気持ちを問われ、手紙を読んでいないとは言えず、ロスは「大事なことから丁寧に読んだ、2回読んだ」と嘘をつく。

(エ) 場面4：手紙を読んだ後、気持ちを問われるロス(下線部は発言の重なりを示す。)

Rachel: So, ah, “Does it?”

Ross: ...Sorry? (手紙のその質問箇所までまだ読んでいなかったの、どういう質問かわからない。)

Rachel: Does it?

Ross: Does it? (↓下降調) Does it? (↓下降調 時間を稼いでいる) Yeah, I want to give that whole “does it” part just another glance.

Rachel: What are you talking about, Ross? You’ve just said that you read it twice. Look, you know what, it’s either “does” or “doesn’t” and if you have to think about...

Ross: No! Rach, I don’t, I don’t have to think about it. In fact, I’ve decided. I have decided that..that...it... (考えて) ... “does.” (一か八かで肯定を選んで答えた。)

Rachel: (意味を少し考えてから、ロスにハグ。) Are you sure?

Ross: Sure... sure! (と答えつつ、手紙の質問部分を必死で探す、見つからず、そのまま、ハグでごまかす。) S4Ep1「渚でロスとレイチェルその後」

後に一人となり、手紙を読み直したロスは、“It so does not!!”と叫ぶ。レイチェルの問いは“If you accept full responsibility, I can begin to trust you again. Does that seem like something you can do? Does it?”(もしあなたが[このもめごとの]全責任を認めるなら、私はまたあなたを信用できるわ。それはあなたができそうなことかしら?できそうなこと?)だった。ロスにとっては、別れている間なのに「浮気した」と責められている件について、「全責任を認める」という条件であった。それは全くロスの意に反した、認めがたい内容だった。

このように、ロスは自分が何に関して責任を認めているのか、どの範囲の責任を認めているのか、が分かっていないまま、交際を再開したいがために「そうだ」と答えてしまった。

レイチェルはロスが全責任を負った、自分の非だと認めたことで、「冷却期間を置こうといった直後の浮気」という許しがたい事件も許す、もう一度ロスを信頼する、と決めて交際を再開した。

一方のロスには「浮気と言うが、別れている期間なのだから、浮気ではない、しかも、別れようといったのはレイチェルの方だ」と、不満で仕方がないが、そう言ってしまっただけでは交際を続けられないので、我慢することにした。

だが、もちろん我慢は続かない。S4Ep21「二人の思い出、ロスとレイチェル」で、ついにロスの不満が爆発する。ベッドで話している際、レイチェルが「手紙の件は心配した」等に続けて次のような会話となる。

(オ) 場面 5 : 不満が爆発するロス

Rachel : Oh, I just wish we hadn't lost those four months, but the time was what you needed just to gain a lit-tle per-spec-tive. (下線部 : そう言いつつ、ロスの頬を子供にするようにリズムをつけて軽くポンポンと叩く。ロスは感情が抑えきれなくなる。)

(復活するまでの) 4 か月間がもったいなかったけど、それはあなたが物事を正しく見るために必要な時間だったのよね。

Ross: WE WERE ON A BREAK!!! (叫ぶ) あれは別れていた間のことだ!!! S4Ep21「二人の思い出、ロスとレイチェル」

コメディであり、大げさに面白おかしくしてあるが、責任、非を認めることの重大さ、という点で興味深い事例である。ロスは自分が何の責任を認めているのか分からないまま、レイチェルに問い詰められたので、ともかく事態を收拾し、彼女との交際を再開したいため、適当に返事をしてしまった。結果はたまたまレイチェルの望む答え、正解であったが、実はそれはロスが最も認めたくない、2 人の中のもめごとについて「全責任を認める」という条件であった。不服であることを隠してその後交際を続けても、やはり不満は爆発した。この “We were on a break.” をロスが事あるごとに引っ張り出しては友達に愚痴るので、友達も辟易している。ロスはそれだけにとどまらず、別れたレズビアン元妻との間の子供ベン、さらには数年後にレイチェルとの間にできた子供エマがまだ赤ちゃんの時にも、パパと友達レイチェルの話を語って聞かせ、「僕たちはその時別れていたんだ」と吹き込むほどである。

レイチェル側から見ると、ロスが「交際が終わった」と思っていたとしても、その直後に他の女性と関係を持ったことは許せない重大事である。しかし、ロスが「全責任を認める」という、ハードルの高い条件をのむ、不満はあってもそれをこらえて全責任を認めるなら、その努力を認めて、自分も許す努力をしよう、再度信頼して許してあげようとレイチェルは考えた。レイチェルの「許す」行為にも努力が要るのである。

このように、特に深刻なもめごとにおける謝罪の場合、その出来事が起こった責任を認めるかどうか、認めるとして、どの範囲まで認めるか、は慎重に考えるべき重大事であるということが分かる。

謝罪の受け手側も、単なる謝罪の言葉だけでなく、相手がどの程度責任を認めているか、時には多大な努力をして認めるか、を見ている。たとえ、今回のレイチェルのように、多少不満はあっても、相手が相当の努力をするのなら謝罪を受け入れる、という

こともある。

4. まとめ

本稿では、アメリカ TV ドラマの会話にみられる謝罪行為について、その状況・発言・行動を詳細に観察し、謝罪をするにあたって自己の責任をどのくらい認めているのか、ということと、聞き手が謝罪をどのような場合に受け入れるのか・拒否するのか、ということについて分析した。

責任を認める・自己の非を認めることについてのハードルが高いと考えられる文化では、聞き手は相手はその責任範囲や認めたこと、謝罪の仕方に納得が行けば謝罪を受け入れる。「クローザー」の例で見たように、納得がいかなければ受け入れない。日本のように謝罪を受け入れるかどうか曖昧なままにせず、受け入れるか、拒否するのか、通常は表明するようである。受け入れる場合は“Apology accepted.”, “Thank you.”, “I appreciate.”、拒否する場合は“Apology not accepted.”などが用いられる。

また、「フレンズ」の例に見られるように、時に、謝罪を受ける側が、一部納得の行かない部分もあり、相手を許すことに相当の努力を要する場合もある。その際も、相手が責任を認めることに相当の努力をしているならば、その努力を認識し、相手を信頼して謝罪を受け入れる、ということもあることが分かった。

謝罪という行為は、謝罪の仕方、表現、責任範囲をどうとらえるか、が国や地域、文化によって異なり、かつ、相手の国や文化についてのそのような複雑な知識がないことも多いので、ミスコミュニケーションが生じやすい。外国語教育においては、単に語彙や表現を教えるだけでなく、出来るだけ、状況を把握できる実例を与えながら、文化や考え、行動様式の違いも教えてゆきたいものである。しかし、学習者、特に入門期の学習者が体験する学習対象言語の日常会話では、謝罪はそう頻繁には出てこないと思われる。体験機会の少ない「謝罪」行為について学ばせるためには、映画やドラマなど、謝罪に至る状況や謝罪の仕方、謝罪を受ける側の反応、などが分かる映像を利用することは非常に有効であると考えられる。

参考文献

- Abdi,R. and Biri, A.(2014). A Study of Apology Speech Act in Sitcoms: Implications for Language Teaching and Learning. *English Language Teaching*. Vol.1, No.3.37-57.
- Blum-Kulka, S. and Olshtain E.(1984).Request and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, Vol.5, No.3. 196-213.
- Cohen, A.D. and Olshtain E.(1981). Developing a measure of socio-cultural competence: the case of apology. *Language Learning*.31.1.
- Culpeper, J. and Haugh, M. (2014). *Pragmatics and the English Language*. Palgrave Macmillan. [ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー著「新しい語用論の世界

- 「英語からのアプローチ」椎名美智（監訳）(2020).研究社.]
- Hofstede, G., Hofstede, G.J., and Minkov, M.(2010). *Cultures and Organizations—Software of the Mind*. McGraw-Hill.
- 堀江・インカピロム・プリヤー(1993). 謝罪の対照研究—日タイ対照研究—. 『日本語学』 12-12. 22-28. 明治書院.
- 池田理恵子(1993). 謝罪の対照研究：日米対照研究—face という視点からの一考察—. 『日本語学』 12-12.13-21. 明治書院.
- 柏木厚子(2015). 映画・テレビドラマにみる日米謝罪表現の差異—オリジナル言語版および吹き替え版の分析から—. 『学苑』 No.893.11-25.
- Kondo, F. and Taniguchi, H. (2008). A Comparative Study of Perceptions of Apology Strategies between Japanese and Americans 『現代社会学』 9号.131-154.広島国際学院大学現代社会学部.
- 熊谷智子(1993).研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—. 『日本語学』 12-12.4-12. 明治書院.
- 熊取谷哲夫(1988). 発話行為理論と談話行動から見た日本語の「詫び」と「感謝」. 広島大学教育学部紀要. 第二部 / 広島大学教育学部 編. 37.223-234.
- 村田和代・大谷麻美(2006). ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの指導の試み. 堀素子・津田早苗他 『ポライトネスと英語教育—言語使用における対人関係の機能』 第10章 195-230. ひつじ書房.
- 中道真木男・土井真美(1993). 日本語教育における謝罪の扱い. 『日本語学』 12-12. 66-74. 明治書院.
- 生越まり子(1993). 謝罪の対照研究—日朝対照研究—. 『日本語学』 12-12.29-38. 明治書院.
- Olshtain, E. and A. Cohen (1990). The learning of complex speech act behaviour. *TESL Canada Journal/Revue TESL du Canada* 7/2, 45–65.
- 大谷麻美(2007).対人関係を築くための異文化コミュニケーション教育—その現状と課題—. 『奈良大学紀要』 36. 53-67.
- 大谷麻美 (2008) 謝罪研究の概観と今後の課題：日本語と英語の対照研究を中心とした考察 A review of research on apology : Japanese and English cross-cultural comparisons 『言語文化と日本語教育—第二言語習得・教育の研究最前線』 増刊特集号. 24-43.
- Spencer-Oatey, H.(2008). Face, (Im)Politeness and Rapport. in Spencer-Oatey, H.(2008(2013)) *Culturally Speaking: Culture, Communication and Politeness Theory*.(2nd edition). Bloomsbury.
- Sugimoto N.(1989-9). “Sorry we apologize so much”: Linguistic Factors Affecting Japanese and U.S. American Styles of Apology. *Intercultural Communication Studies VIII-I*.71-

78.

Suszczynska M. (1999). Apologizing in English, Polish and Hungarian: Different languages, different strategies. *Journal of Pragmatics* 31.1053-1065. [http://dx.doi.org/10.1016/S0378-2166\(99\)00047-8](http://dx.doi.org/10.1016/S0378-2166(99)00047-8)

高橋優子(2012).これまでの日中の「謝罪」表現研究の問題点と今後の課題. 文化外国語専門学校紀要 25.1-8. <http://hdl.handle.net/10457/1255>

高野陽太郎・櫻坂英子(1997). “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”一通説の再検討『心理学研究』Vol. 68, No. 4, 312-327

鄭加禎(2006). 謝罪行為における差異—日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究. 『アジア社会文化研究』7. 57-73. アジア社会文化研究会. 広島大学学術情報リポジトリ.

上原 麻子(2001). コミュニケーション現象の解明に向けて: コード・モデルから Goffman へ. 『異文化コミュニケーション研究』13巻, 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所. 31-57. URL <http://id.nii.ac.jp/1092/00000272/>

上原 麻子(2002). コミュニケーションと文化—多文化社会に向けて—. 広島大学大学院国際協力研究科『国際協力研究誌』第8巻第2号. 11-24.

梅田礼子(2019). 「謝罪」のストラテジー: アメリカ TV ドラマに見られる「謝罪」. 『大同大学紀要』第55巻. 1-4.

梅田礼子(2021). アメリカ TV ドラマにみる謝罪とその受け入れ. 『和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要』第2巻. 78-99.

用例出典

アメリカ TV ドラマ

The Closer 「クローザー」. 制作ジェームズ・ダフ. アメリカケーブルテレビおよび衛星テレビ局 TNT(2005年～2012年). S4Ep4 「取引不成立」(Live Wire, 2008)

Friends 「フレンズ」. 制作ワーナー・ブラザーズ・テレビジョン、製作総指揮ケビン・S・ブライト、マーサ・カウフマン、デヴィッド・クレーン. NBC(1994年～2004年). S3Ep15 「恋の行方(前編)」(The one where Ross and Rachel take a break, 1997)、S3Ep25 「渚でロスとレイチェル」(The one at the beach, 1997)、S4Ep1 「渚でロスとレイチェル、その後」(The one with the jellyfish, 1997)、S4Ep21 「二人の思い出、ロスとレイチェル」(The one with the invitation, 1998)